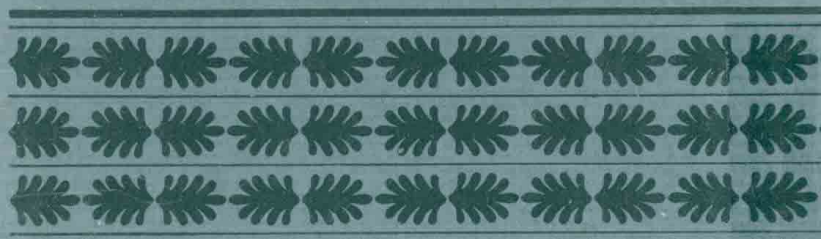


潮をきむ時

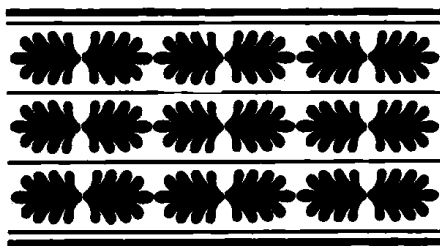
藤本 泉



講談社文庫

時をきざむ潮

藤本 泉



講談社

時をきざむ潮

藤本 泉

昭和55年9月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社千曲堂

© Sen Fujimoto 1980

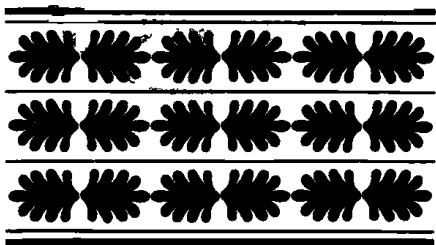
Printed in Japan

0193-361761-2253 (0) 定価420円

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

潮をきざむ時

藤本 泉



講談社

目次

第一章	海の墓場	七
第二章	若い秀才たちの軌跡	五七
第三章	白蟹の浜に	一〇七
第四章	オビの開く日	一六四
第五章	まつろわぬ民	二二六
第六章	その時刻は	二七六

解説

中島河太郎

三四三

時をきざむ潮

貝がらの

掻き傷のような月から

大亀の丸い甲羅こうらのような月へ

時が長い脚で

潮を追う汀なぎさに

人の影は錆びて

小さく崩れる

（メラネシア民謡より）

第一章 海の墓場

一

クレーンの黒と黄だんだらの腕が、潮にぬれた鎖の触手しよくしゅをきらめかせながら、ゆっくりと的確な動作で動く。

同じところを行きつもとどりつしているように見えて、実は絶えず少しずつ、軌跡のちがう浅い弧をえがいて往復する。それにつれて人々の立つ、細長いくさび型の岩場の、突端近い海は、ひとところだけ砂を沸き立たせて濁った。待ち続けた視線が、ここつて堅くそこへ集中する。何かしら平たい大きな金属性のものが、吊り上げられ始めたのである。

四本の鎖の先についた、柄のある鈎かぎにからめとられて、わざとのように徐々じゆじゆに、潮の中から姿を現したのは、砂まみれの小型乗用車だ。いやいやながらといったふうに、汀なぎさの岩場の上に、尻上りに、ななめうしろ向きに上って来る。砂まじりの潮水を、至るところから、こらえ切れずあふれるようにしたたらず。それは大きな動物の死骸のように、グロテスクにも奇妙なものに見えた。

高館たかだて刑事は同僚たちに混って、緊張した目をはげしく、しばたいた。

早朝からの探索が、やっとひとつの山場に近づいたのだ。

それだけでなく、かわいて白っぽい岩だらけの浜に、海辺の日光が強い。このところずっと

曇っていたつゆ空が、今日は晴れたのだ。すべての物の影は、垂直に短かく深く、悪意をもって彫りつけたようである。

それはいま、さらに濃くなった。

クレーン車のエンジンの、重いうなりは続きにくく。曲った腕の先で、鎖がきしりながら、なおも張りつめる。乗用車は灰色の軽四輪だ。後じさりのまま、もう、前輪まで岩場へ上りかけた。

高館永夫は、敵意を燃やして詰めよる目つきで、足を踏みしめて車へ近づいた。煤けた灰色の塗料もはげ、バンパーも窓枠も、びっしりと錆を吹いている。しかし、車全体のシルエツトにゆがみはみえない。無傷のまま海没したようだ。

ナンバープレートは岩手県のもので、これは搜索願い通りだ。しかし、ナンバーそのものは右半分が消えていて、よく読めない。わ52―？ いや、届け出は、わ81―61のはずだった。

運転席側のガラス窓は半ば開いている。座席は砂でいっぱいだ。その中に埋もれて、人間の頭部が少し見えた。レッカー車のエンジンのひびきが止んだとき、高館刑事は強く指を鳴らした。開いた窓から、もう、中をのぞきこんでいた。

遺体は二体である。

前部座席に、重なっている。

一体はハンドルに覆いかぶさるように。もう一体はそれに寄りそうように――。九分通り彼らを埋めた、ぬれて重そうな砂。その中から出ているのは、それぞれ後頭部と肩のあたりだけだった。しかし、髪の毛のぐあいと、肩つきで、どちらも男であることはすぐわかる。

「さわらないで！ 及川さん！」

高館永夫のすぐうしろから、踵^{かかと}を踏まんばかりに近づいた男を、そのとき、鑑識課の小野寺巡查が制した。「写真を撮るのにじゃまだから、どいて下さい」

彼は言いながら、膝をまげて、車を真横からカメラにおさめる。続いてフロントへまわった。

捜索依頼者の代理、及川という初老の男は、少しひるむようすを見せた。古びた夏背広を行儀よく着こんだ、小柄な肩をこわばらせる。しかしすぐにまた、彼は車に近づいて、まつわりついた。中をよく見ようとして、不器用に動きまわる。疲れた、表情のない細い目が、死者たちの上にねばりつく。うすい頭髮を、海の風がさかなでして吹いた。

そのうち、ふいと彼はうろつきまわるのをやめた。おびえたように、ゆっくりと「一、二歩うしろへさがった。ぜんまいが切れたようにだしぬけに言いだす。

「なんだか、ちがう。これはうちの誠坊^{せいか}っちゃまではない。どっちも、ちがうようです」

思わずよろめいたように、彼は岩場のわずかな高みに腰をおろした。「刑事さん、顔がこう変っているのは、見分けがつかないけれど、でも、こんな服を着ているのは、見たことありません」同じようなことばを、咎^{とが}めるようにくり返す。一瞬の安堵に似たものが、すぐまた、不安へ逆もどかしそうな声だ。何度も浜風に消えるライター^{ライター}の火で、やっとたばこを吸いつける……。

高館はそうした及川のほうへ、ちらと視線を走らせ、わかったという表情をしてみせた。

二体の死者はもうそのとき、車の中から引き出され、くさび型の岩場からずっとうしろにさがった、たいらな場所にひろげたビニールシートの上へ、仰向けにならべられていた。古いボール紙のように水を吸ってふくれ上り、どちらへでもやわらかく、こたえなくまがる遺体であ

る。その腫れ上った顔つきでは、とても年齢はわからなかった。

しかし、茶のブレザーにアイボリーのズボン、白靴という服装は、どっちかと言えば若い男に多いだろう。それともかなりしゃれたものだ。

鑑識の小野寺巡査のさしずで、警官たちは、手袋をはめた手に、手箒やプラスチックのへらを持ち、死体から砂をこそげ落していた。クレーン車から降りて来た、釜石警察署の若い巡査ふたりも、地元白蟹村の駐在巡査八重樫も手伝い、顔形や服装がよく観察できるまでになったのである。

（わかつてる。これは、届け出のあった船渡誠記では……なさそうだ）

高館は心の中でうなずきながら、手帳にメモをとっていた。（この仏は、とても一日や三日、海に漬かっていた代物じゃない。顔のかたちは崩れてるし、目の玉はとろけかかっている。臭いなんか、ひどいものだ。どうみても、かなり長いこと、海の底にいた見当だ。車の錆び方だって、みろ、ワイパーなんか、ぼろぼろだ）

それに、行方不明の船渡誠記が乗っていたレンタカーは、白色でスバルのレックスだったはずだ。いま引き揚げられたのは同じ軽四輪でも、灰色で、ホンダのツインなのである。そして、船渡誠記は花巻市でレンタカーを借りるときは、たしか一人だったはずなのに、車の中の死者は二人だ。

もつとも、これは途中でつれができたと考えればいいのだが、それにしても、この二人連れは特殊な二人連れである。服装がまったく同じである上に、顔つきもどうやらそっくりなようだ……。

「高館さん。こりゃあ、双生児だべか」

そのとき、小野寺も気づいたとみえて言い出した。「見てくださいよ。それ、靴のデザインまでいっしょだ。子どものころは、同じ服装をしている双生児つてのがいるもんだが、おとなになってこういうのは、みたことがない」

彼は顔をあげ、ほかの同僚たちに注意を与えた。

「体についてる砂は、シートの上へ集めておいてくれ。ほかへちらかさないで……な。あとでその中を調べるから。何か入ってるかもしれない」

彼は死者の口の中の、まるでほおばったようにいっぱいの砂を、指先で注意深くかき出しながら、また高館に言った。「この分じや、気管の中まで砂がつまっていそうです。この仏たちは水で溺れ死んだじゃなくて、砂で溺れ死んだだべね」

「浮き砂とか、流砂とかいうやつらしい。話にはきいたことがあるが、おれもこれは初めてだった。竿などいくらでも、もぐるだから、一種の底なし沼だべ」

高館は改めて説明しながら、三日前の六月二十日にここへ来て、水深を計ってみたときのことを思い出していた。実に妙なところだ。こわいようだ。

——そのあたり一帯、表面の海水はやつと一メートルあるかなしで、澄んだ潮の中では、海底の清らかな砂の色まで青い。ちよつと足を踏み入れてみたくなるような、浅い場所に見えたのである。そのくせ、彼が念のために、持って来た継棹を砂の中につっこんでみると、これがどこまでもやわらかに沈んで行くのだった。

四本に分かれているのをつぎ合せれば、全長が三メートル近くなる細い棹が、いささかのたゆ

たいもなく一直線に入って、なお、海底に届いた手応えがない。おだやかに波の寄せる、岩場のすぐ近くがそうなのである……。

いま、高館は運転席のほうにいた死者の背広のポケットをさぐって、運転免許証をみつけ出していた。立ち上りざま、すばやく読んだ。

昭和二十六年生まれの下屋敷^{しもやしき}国人、本籍は岩手県^{いわて}九戸郡である。現住所は東京都台東区柳橋となっていた。

さすがにカラー写真入りの免許証は、ビニールカバーに密封されているせいで、印刷された字はよく読みとれるし、本人の顔つきもかなりはっきりとしている。

たよりなくふくれてゆがみ、年齢もわからない死者の顔が、証明書用の、正面向きの写真では若々しい、苦勞知らずの男の表情を示していた。きちんと分けた濃い髪の下に、なんとなくひよわそうな大きい目があり、鼻筋が通って、まず好男子の部類に入る。この死者たちが、もしもほんとうに双生児ならば、そっくり同じ顔ということで、もうひとりの助手席の男も、生前はこんな顔をしていたのだろうか？

（それにしてもこれはまた偶然だな。おれたちがここへ捜しに来た船渡誠記も昭和二十六年生れだ。それに……やっぱり本籍は岩手県で、現住所は東京都台東区だ。つまり三人揃って同じ年齢の同じような住所の若い男が、同じところで事故を起こしたことになる）

高館は一瞬妙な気がしながらも、心はすぐにもっと実際的なことへ向いた。（どっちにしても、この仏^{ぼん}たちのことは、東京の管轄署へ電話を入れなくては……。おそらくもう、搜索願いが出ているだろうが）

そのとき、いつの間にか彼のうしろへ来ていた及川が、懇願する口調で言い出した。

「刑事さん。もっとほかのほうをよく探してください。どうしても、もう一台このあたりに沈んでいるですよ。坊ちゃん頭の文字のついたハンカチだって、ここに落ちていたのだから、きつと」

自分の事件だけしか念頭にならない言い方である。目の前のぬれそばれて腐爛^{ふらん}しかけた死者たちから、きみわるそうに目をそむけながらも、しやにむにの表情なのであった。「ねえ、まさか、この車が上ったから、私のほうは中止するのじゃないでしょうね」

「いや、それは……」

高館はうるさいと思いながらも、事務的に答えた。「ちょっと待ってください。一応この仏さんたちを始末しますから」

「しかし、わたしのほうが、先に申しこんだのですよ。初めから、この人たちを探しに来たわけじゃないでしょう」

あせってじりじりしているふうだ。「クレーンを遊ばせてはもったいないです。あっちのほうを——。きつともっと向うに沈んでいるんですよ」

警官に指図するのは止せと言おうとして、高館はやめた。この男はただもう、いちずに真剣なのだ。

事故や事件が起きたとき、被害者や遭難者の遺族が示す態度はいろいろだ。この及川のような、なりふりかまわない言い方も、大方は取り乱していて、異常なのだから、相手にしても仕方がない。

十年間の警官としてのキャリアは、高館にそう教えた。また、彼は無口なたちだった。そのま
ま、さらに死者たちの上にかがみこもうとして、体の向きを変える……。

しかし、つぎの瞬間、彼は急にすっかり背を伸ばし、海のほうを見ながら、小手をかざしたの
であつた。

今まで、海没車と死体に氣をとられていた彼の視野の右ななめ前方、くさび型の岩場のすぐ南
側で、海岸線はすっかりそのようすを変えていた。ひるすぎの干潮時が、いつの間にか来ていた
のである。

朝のうち、彼ら一行が到着したとき、百メートルほど向うに浮いて見えた島は、いまは一筋の
岩の道につながれて、岬に変化していた。

幅は三メートルにみたないものながら、潮のひいたあとに現れた、その帯状の岩場は、堅牢な
道路だ。右手の浅い岩底の海に、なだらかに傾斜しながら、一部分はまだ潮についているそのよ
うすは、巨大な岩棚が、南のほうから北側の潮だまりへ向って、徐々にせり上って来たかに見え
る。

いまし方、及川がもっと向うを探してくれと言ったのは、その岩の道の方角をさしたのにちが
いなかった。

二

高館刑事がつとめている下閉伊署へ、船渡誠記についての問い合せが来たのは、昨日、六月二